

淡路地域 掲載企業一覧

※企業名クリックで掲載ページにジャンプします。

企業名	所在地	企業概要
プライミクス	淡路市	様々な分野で使われる攪拌機を製造するトップメーカー

知ってる？

淡路の魅力

淡路島は、洲本市、南あわじ市、淡路市の3市で構成され、南は大鳴門橋で徳島県に、北は明石海峡大橋で神戸市とつながっています。伊弉諾・伊弉冉の二神がこの島でちぎりを結んで日本列島を生みおとしたという「国生み伝説」が残され、延喜式には淡路は天皇家に食糧を納める御食国(みけつくに)であったと記され、古くから豊かな地域であったことがうかがいれます。温暖な気候に恵まれた淡路島では農漁業、畜産業が盛んです。中でもタマネギは全国有数の生産量を誇り、その糖度の高さで全国に知れ渡っています。肉牛の飼育も盛んで「淡路ビーフ」としてブランド化が進んでいるほか、魚介類ではちりめんの生産量が全国有数の規模を誇っています。島内では「淡路ビーフ」「淡路タマネギ」を組み合わせた「淡路島バーガー」がご当地バーガーとして各所で売り出され、人気を呼んでいます。

徳島県とを隔てる鳴門海峡には、潮の干満の差で起きる渦潮が見られ、兵庫、徳島両県で世界遺産を目指す取り組みが進んでいます。また、播磨灘に面する国指定の名勝慶野松原をはじめ風光明媚な海岸線が数多くあります。豊かな食や良質の温泉とも相まって観光産業も盛んです。

古くからの地場産業として知られているのが線香と淡路瓦。線香はお香やアロマにも変化して、より生活に身近な商品群を送り出されているほか、瓦では淡路瓦ならではのいぶし銀の美しさを生かしたデザイン性の高い瓦が商品化され、新たな販路を広げています。

淡路島では、「エネルギーの持続」「農と食の持続」「暮らしの持続」を掲げる「あわじ環境未来島構想」について国から特区の指定を受け、日本が抱える課題解決の先導モデルとなることを目指し、様々な取り組みが行われています。



国生みの神話、日本遺産に

日本最古の歴史書である「古事記」には天地創造、国家誕生の過程が描かれています。その冒頭で、伊弉諾・伊弉冉が日本列島を誕生させていく物語である「国生み神話」の中で最初に生まれた島として記されているのが淡路島です。大陸や朝鮮半島から新しい文化や技術が伝わっていく道であった瀬戸内海の東端に位置し、大和朝廷とをつなぐ中継点としての役割を果たしたであろう淡路島の歴史的作用がうかがい知れます。そのことを裏付けるかのように、2015年4月、弥生時代の青銅器・銅鐸が南あわじ市の松帆地区で見つかりました。保存状態が極めて良いことから



南あわじ市で発見された松帆銅鐸は、弥生時代から淡路島が要所であった事をうかがわせる
(写真提供:南あわじ市教育委員会)

歴史的な発見として話題を呼び、その埋納状態から、弥生時代の新たな祀りに海



民が携わったことを想像させます。

「新たな金属器文化をもたらし、その後塩づくりや航海術で畿内の王権や都の暮らしを支えた海人と呼ばれる海の民は、その後二千年を超える島の暮らしの中で幾度となく振り返られ、その都度、島人のよりどころとなつて新たな文化を創造し、その足跡を記す貴重な遺跡や多様な文化遺産として良好な姿で今も島に残っている」というストーリーで「古事記」の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」〜古代国家を支えた海人の営み〜をテーマに、淡路島は2016年、文化庁によって「日本遺産」に認定されました。

豊かな食文化、淡路島ブランドで発信

万葉集にも詠まれる、海人がつくった塩は、朝廷の

儀式に使われるほど重宝されたと平安時代の法令集「延喜式」には記録されています。塩のほかにも海人が生産する多くの海の幸が皇室・朝廷に献上され、「御食国(みけつくに)」としての役割を果たしたと推定されています。

年間を通して温暖な気候に恵まれ、日照時間の長い淡路島は農業の島としても知られ、淡路島たまねぎやレタス、キャベツを中心とする野菜をはじめ、米やビワやミカンなどの果物、カーネーションなどの花など多彩な農産物を生産しています。兵庫県のタマネギ生産量は北海道・佐賀県に次いで全国第3位で、そのうち95パーセント以上が南あわじ市を中心とする淡路島産です。淡路島たまねぎは、全国で生産されるタマネギの中でもやわらかくてみずみずしいという糖度が高いことで知られています。

海産物にも恵まれる淡路島。ハモは京都の祇園祭、大阪の天神祭で旬の料理として使われているほか、岩屋港で水揚げされる生しらすも全国に知られ始めています。畜産業も盛んで、淡路島で生まれ、肥育

され、品種評価基準により選定された牛を「淡路ビーフ」として認定することによりブランド化が進められています。また牛乳の生産も関西一です。

こうした農水畜産物を加工、流通・販売へつなげ



タマネギやハモなど淡路を代表する食材は数多い。最近では生しらすにも注目が集まっている

ていく6次産業化の取り組みも盛んで、たとえば、淡路島たまねぎを原材料に使ったオニオンソーヤスーブ、カレーなどさまざまなたまねぎ加工品が商品化され、淡路島を訪れた人の土産物として喜ばれています。また、淡路島には伝統的な地場産業も根付いています。中でも19世紀半ばに端を発し、淡路市一宮地区で製造され続けている線香は国内生産の70%を占め、日本一の線香産地として知られています。線香だけでなくお香も生産しているほか、現代的な香りも積極的に採り入れ、香りの文化を広げ続けています。

淡路島の産業は、質の良い粘土に恵まれ、大阪、奈

良、京都に運ぶための港があったことから発展し、現在も南あわじ市の津井・松帆・阿万地区を中心に生産されています。いぶし銀がもたらす独特の色合いが和を演出する役割を果たし、現在では屋根材だけでなく、モニュメントやオブジェなど多様な用途に展開されています。



いぶし銀の色合いが映える淡路瓦は、屋根材だけではなく、オブジェなど様々な用途にも用いられている

あわじ環境未来島構想で、 新たなまちづくりのモデルを提示

淡路島では、豊かな自然の恵みと地域コミュニティの結びつきを生かし、日本が抱える人口減少や高齢化の課題解決の先導モデルとなることを目指して「エネルギーの持続」「農と食の持続」「暮らしの持続」をテーマにした「あわじ環境未来島構想」を県・市・住



季節ごとに花を楽しめるあわじ花さじき。春には菜の花が一斉に咲き乱れ一面が黄色に覆われる

民・地域団体・企業などが協働して推進しています。2011年には、国から地域活性化総合特区の指定を受け、取り組みはさらに本格化しています。具体的には、再生可能エネルギーの活用、電気自動車の普及、農業人材の育成、地域資源を生かした集落の活性化などで、2050年までにエネルギー（電力）自給率100%、生産額ベースの食料自給率は300%以上などを目標数値として掲げており、生活の質を重視した新たなまちづくりのモデルを築いていこうとしています。



エネルギー自給100%に向け、メガソーラーや風力発電施設の建設が進みつつある

人の交流による地域の創生

1998年4月に明石海峡大橋が開通して以降、

淡路島はより身近な島になりました。季節ごとに花が楽しめる「あわじ花さじき」、世界最大級の「鳴門の渦潮」、数多くの温泉など観光資源にも恵まれる淡路島。2014年4月1日からは明石海峡大橋（垂水IC）淡路IC間の通行料金が900円に大幅値下げされ、観光客数の増加につながっています。

2017年には、洲本市五色町出身の豪商・高田屋嘉平に関係が深い北前船が寄港した地域の関係者が集う「北前船寄港地フォーラムin淡路島」、ユネ



明石海峡大橋は世界一長い吊り橋とされ、物流や人の往来に劇的な利便性をもたらした

スコ無形文化遺産に登録された『和食』や御食国淡路島の魅力を全国へ発信する「御食国・和食の祭典in淡路島」が開催されるなど、人々の交流を通じた淡路地域の創生が図られています。